
口頭研究発表 9 / -Oral Presentation 9 -

湿地保全活動の展開の ESD としての意義と可能性 ～兵庫県豊岡市におけるコウノトリ野生復帰事業を事例に～

*石山雄貴(東京農工大学大学院),黄衛鋒(同),秦範子(同),丸谷聡子(同志社大学大学院),稲木瑞来(同)

1.ESD(持続可能な開発のための教育)の視点の必要性

今日、地球上には環境破壊につながる様々な問題が生じており、その解決に向け、一人一人が主体的に取り組み、それを支える社会や経済のあり方を創造していくことによって、持続可能な社会を構築していくことが求められる。そのためには、ESDという環境的視点、経済的視点、社会・文化的視点から、より質の高い生活を次世代も含む全ての人々にもたらすことのできる開発や発展を目指す教育(環境教育指導資料)がそれを支える人の育成として欠かせないものとなる。

2.持続可能な社会を構築としての湿地保全活動の可能性

ラムサール条約で定義されている湿地は、狭義の湿地、つまり保全するべきものとして人間の日常生活から区切られた領域だけではなく、水田や水路等の人間の日常生活の空間に存在する領域も含んでいる。そういった広義の湿地の保全のためには、湿地をめぐる環境保全や湿地を住处とする様々な生物との共生を軸に据えた地域づくりをしていく必要がある。この意味で、湿地保全活動は、持続可能な社会の構築に向けた取り組みとしての可能性を持つ。そのためには地域全体で行う必要があり、地域を「持続可能な地域」として転換していく必要がある。そのためには、持続可能な社会に向けた知識の獲得、行動様式、ライフスタイルの変革が求められ、その過程には様々な学びが不可欠となる。

3.本研究の目的と課題

そこで本研究では、兵庫県豊岡市のコウノトリ野生復帰事業の取り組みを事例に、湿地保全活動に向けた市民の様々な学びにおける ESD の意義と可能性を明らかにすることを目的とする。豊岡市は、コウノトリの保護活動、人工繁殖を行ってきており、2004年の放鳥の成功後は、コウノトリ野生復帰事業を開始し、コウノトリが餌場とする湿地保全の取り組みを行っている。現在に至るまで、コウノトリ文化館の設立、生物多様性戦略の策定など行政の取り組みだけではなく、NPOを中心とした活動など様々な活動が豊岡市を舞台に行われている。本研究では、特に、田結地区における取り組みに注目し、考察していく。